

## 『クリスチャンの妻として③』

'23/03/05

聖書箇所:エペソ人への手紙 5章 22-24節(新約 p.379-)



ここ2回…、私たちは、クリスチャンの妻が、どのような感じで自分の夫に仕えていくべきなのかということ学んできています。先週、この礼拝で学んだように、この新約聖書が書かれていた 2000 年前は、女性の地位が非常に低い時代でした。そんな中で書かれた聖書は、その後、間違いなく、世界中で女性の地位を向上させるといって貢献をしました。しかし、現代になって時々言われることは…、「聖書の教えは、2000 年前のこの当時からすると斬新であったけれど、現代にあっては少々時代遅れである…」ということです…。

しかし、そういったことは全く、的外れの指摘です。…と言うのは、聖書は単なる指導書や何かの教本では無いからです。聖書とは、すべてを造られた真の神様が、その教えを…、私たちに分かるような形で書き記して下さった…、神様からのお言葉なのです！斬新だから良いとか、時代を先読みしているから評価できるなどと言うのは全く的外れの感覚であって…、私たちが聖書を学ぶ上で、1番大事なことは…、真の神様が一体、どのようなことを教えてくれているのか？どのように生きていくことが神様の前に正しいことなのかということ、神様の前に聞く耳をもって、学んでいくことであるはず…、どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今回の聖書箇所であるエペソ 5:22-24 をお開きください。初めに、お読みいたします。

### 命題:「クリスチャンの妻は夫に従うべき」ということの、間違った理解？

<エペソ 5:22-24>

22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

今日で3度目になりますが…、私たちは、今程お読みしたみことばが教えて“いない”、間違った理解について、ご一緒に学んでいきたいと思えます。そうすることによって、今回のメッセージを聞いて下さった皆さんが、よりはっきりと、聖書のみことばが教えていることと…、逆に、聖書のみことばが教えていないことを…、明確に、区別できるようになっていくことを願います。

### I・妻は、夫の「しもべ」である？(22節)

まず、先々週に学んだことは、「妻は、夫の「しもべ」である」という間違いです。妻は、自分の夫の言うことや行なうことに対して、ただ、「ハイ、ハイ」とだけ言って、従っていれば良いというのは、明らかに、聖書の教えではありません…。神様は、女性を、男性から見て、『ふさわしい助け手』(創世記 2:18)となるように造られたのであって、必要な励ましやアドバイス、また、助けを与えるような存在として造られたのであって、決して、奴隷のような…、男性の言いなりとなるような存在として造られたものではありませんでした…。

この個所で、『従う…』と訳されてある言葉(ὑποτάσσω)は、子どもがその親に対して従うとか…、あるいは、奴隷がその主人に対して、「従いなさい！」と命じられている言葉とは違う種類のものでした…。この個所で、妻がその主人に対して、「従いなさい！」と命じられている言葉は、単なる命令ではなく…、どちらかと言うと、自発的な行為…、謙遜の延長線上にあるような…、あるいは、自由意志から来るような従順のことであります…。

### II・妻よりも、夫の方が「優れて」いるから？(23節)

次に、先週学んだことは…、妻よりも夫の方が「優れて」いるから、妻は夫に従うべきなのだというような、当然、これも間違った理解でした。聖書は、決して、男性と女性とを比べて…、どちらが勝っているとか、どちらの方が劣っているなどとは、一切教えてはけません…。

実際、ガラテヤ 3:26-28 のみことばは、このように教えてくれていました。『26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。』⇒このように、イエス・キリストを信じて救われた者は皆…、等しく、『神の子ども』なのです！そこにはもはや…、人種や身分だけでなく、当然、性別による差別も一切ありません！…というのが、聖書の教えなのです。

じゃあ、どうして…、聖書では「妻は夫に従うべきである」などと教えるのでしょうか？皆さん、覚えて下さっていますか？⇒①まずは…、それが、神様の御定めになられた「秩序」であるからでした。…ちょうど、車を運転する時…、家族の皆が乗っていたとしても、運転するのは誰か1人だけです…。夫婦だからと言って、一緒に運転するなどということは有り得ませんよね？…それと同じように、家族にあっては、夫が家族をリードしていきなさいと、みことばは教えるのです。妻は運転そのものをしていなくても、夫にアドバイスすることはできます…。夫が運転できなくなったら…、妻が代わることでできてきますよね？それと似たようなことを、聖書は教えてくれているのです…。

②もう1つの理由は、妻が夫の「愛護」によって守られているからです。創世記 3章をご覧くださいと、神様に背いて、罪を犯してしまったアダムに対して、神様はこんなことをおっしゃっておられます…。創世記 3:17-19、『17 …あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。』

⇒先週確認したように、神様は、創造の初めから、夫であるアダムに夫婦間の責任を任せられました。しかし、そのアダムは、今、お読みしましたように、『妻に聞き従(つ)て…』、罪を犯してしまいました。つまり、アダムは、神様から託された夫としての責任を「放棄」してしまったのです…。そんなアダムに対して、神様がおっしゃられたのは、今後、男性は、『顔に汗を流して糧を得…』、『一生、苦しんで食を得なければならない…』ということでした…。また、エバに対して神様がおっしゃられたのは、「出産の時の苦しみが増し加わるということと…、それまでは夫と妻とが良い感じでお互いを支え合っていたのが、罪を犯してしまって以降は、夫の方が優位に立つであろう…」ということでした。皆さんもよくご存知のように…、私たちは今もなお…、その影響下にあるのです…。

もう1つ…、先週見たように、男性は腕力においては女性よりも勝っています。ですから、神様が、現代の私たちに対して期待しておられることは、夫が妻を守り…、経済的にも、また、霊的にも妻を養っていくということです。もう少し後で学んでいくみことばですが、エペソ 5:29 では、夫と妻のことを指して…、『だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。』とある通りです。妻の方はそういったこともあって、自分の夫を立てて…、自分の夫に仕えていきなさい！というのが、神様のみこころなのです…。

### Ⅲ・妻は、**どんなことでも** 夫に従わなければならない？(22-24 節)

その次に、最後3つ目のポイントとして学んでいきたいことは、**妻は、「どんなことでも」自分の夫に従わなければならない、といったような間違い**です。…これに関しては、**今日のみことばの 24 節をご覧ください**ますと、『教会がキリストに従うように、妻も、**すべてのことにおいて、夫に従うべきです。**』と、はっきりと、書かれてありますので、このみことばとの「兼ね合い」が必要になってくるのかも知れません…。

#### ●私たちクリスチャンにとっての、究極の 主人 とは？

しかし、実は、これはそう難しい問題ではありません。…と言うのは、今回のみことばの **22 節をご覧ください**ますと、『妻たちよ。あなたがたは、**主に従うように、自分の夫に従いなさい。**』とあるからです。皆さん、お分かりになっていただけます？…確かに、この箇所では、『**自分の夫に従いなさい**』ということが教えられています、その前に、『**主に従うように…**』とありますでしょ。つまり、「主に従う」ということが前提条件になっているのです！ですから、このみことばを、もう少し意味を汲んで訳し変えてみますと…、「妻たちよ。あなた方は神である主に従っているでしょ！だったら、自分の夫にも従いなさい。それが神様に喜ばれることなのでから…」というような感じなのです。

つまり…、クリスチャンの妻にとっての最優先人物は、自分の夫ではなく…、神様だと教えてくれているのです！確かに…、聖書はそういったようなことを別の聖書箇所でも教えてくれています。例えば、**コロサイ 3:18** には、『妻たちよ、**主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。**』とあって…、ちょうど、今日のみことばと同じようなことが言われています。

また、もう少し分かりやすいみことばは、イエス様の教えでしょう。どうぞ、**マタイ 10:34-39** をご覧ください。**『34 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。 35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。 36 さらに、家族の者がその人の敵となります。 37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。 38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。 39 自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。』**

この **34 節**で、『**～ために来た…**』という言葉がありますが、この言葉は理由や目的を表わしているのではありません…。実は、この箇所には、結果を表わす表現が使われてあります。つまり、イエス様がここでおっしゃったことは、家庭内に分裂を起こさせるために、イエス様がこの地上に来られたというのではなく、あくまでも、結果として、家庭内に問題や分裂を引き起してしまうことが有り得る、ということなのです。

それもそのはずです。何故なら、イエス様は、1 番の主人に関して、**マタイ 6:24** で、**こんなことを教えられるからです。『だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。』**って…。真の神様が、救われた私たちに望んでおられることは、私たちが神様を第一として歩んでいくことです。この、『**主人**』という言葉は、奴隷に対する主人を指す言葉で…、当然のことながら、奴隷には何人も主人が居るはずがありません。「唯一の主人」とも言うべき意味なのです。

そのように…、私たちクリスチャンが究極的には神様を第一とすべきことを、みことばは教えています。例え、それが親であろうと…、あるいは、子どもであろうと、職場の上司であろうと…、私たちクリスチャンは、神様以外に何者をもすえなで、神様だけを第一とすべきなのです。私たちが、そのようにする時…、そこに家族からの反発や問題が起こり得るということを、イエス様は予め警告してくださったのです…。

このように、「クリスチャンの妻は、どんなことでも、自分の夫に従わなければならない！」というのは全くの見当違いであって…、例え、妻であろうと…、あるいは、夫であろうと、私たちクリスチャンにとっての最高の主人は、真の神様であり…、救い主であられるイエス・キリストだけです。皆さんだって、そうでしょ？

何故なら、聖書ははっきりと教えてくれているからです、「この神様だけが主権者である」って…。そうじゃありません？すべてのものは、この神様によって造られ…、この神様によって維持されているからです。それゆえに…、すべての存在は、本来、この神様の前に従うべきなのです。I **テモテ 6:16** に、『…**誉れと、とこしえの主権は神のものです。…**』とある通り…、神様だけが本当の主権者なのです。

クリスチャンである私たちは、その相手が自分の夫であろうと、妻であろうと…、例え、誰であろうと…、神様を第一として従うが故に、聖書がはっきりと罪であると教えていることは、犯すべきではありません。聖書を見て分かる通り…、真の神様とは完全に聖い神様です。だから、その神様が罪や間違ったことなどを、私たちに要求するはずはありません…。そうでしょ！

確かに、天の神様は、クリスチャンの妻である皆さんが、その夫に対して、従うべきことを願い…、また、教えてくださっています。…しかし、それらはあくまでも、「その中身が罪で無い場合」です。…ですから、いくら、それが、ご主人の命令であったとしても、それが、罪であったり、あるいは、神様のみこころに沿わないようなことなら…、クリスチャンの妻であろうと、あるいは、子どもや部下であろうと、私たちは勇気を持って、「イヤです！できません！」と言うべきなのです。…そうじゃないでしょうか？

少し前に学んだエペソ 5 章の前半で、私たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちの、生まれながらの性質が大きく変えられたということを学びました…。かつての私たちは、暗闇そのものであったのに…、それが光へと変えられたのです！そのように…、信仰というものは、私たちの表面だけ…、上っ面だけを変えるではありません。私たちの根本を…、もう、本質から、すべてを変えてくれるのです！だから、イエス様を信じて救われた者は、その行ないだけではなく…、生き方までも変えられていくのです…。

ですから、どうか、皆さん、分かってくださいませ？…人を救うことができる「**本物の信仰**」というものは、私たちの人格や生き方などと深く関わってきます…。救われた人から信仰を取り除くということは、もう不可能なのです！もしも、その人が、本当に、イエス様を信じる信仰によって救われているのなら…。

だって、イエス様も、救われた者たちが、その救いを失うことがあるかどうか？ということについて、こう教えてくださったでしょ？ヨハネ 10:28-29、『**28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。 29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。**』って…。⇒このように、1 度、イエス様によって救われたら、その人は、絶対に救いを失うことはありません！…と言いますのは、天の神様が…、全能なる神様が、その人のことを守ってくださっているからです。

ですから、クリスチャンの妻だけでなく…、イエス様を信じて救われたクリスチャンの皆さんは、イエス様を信じたことによって、もう既に変えられているのです！夫である皆さんは、ご自分の奥さんを愛しておられるはずですよ…。でも今の、その奥さんの人格というものを形成するにあたって…、信仰というものは、間違いなく大きく関わっています…。ですから、その奥さんから信仰を取り除こうとするのではなく、その…、信仰を含めた奥さんのすべてを、自分が愛しているのだということに、どうか、気付いていただきたいと思ひます。

そして、もう1つ…、クリスチャンの奥さんは、それが神様のみこころであるから、ご主人のことをますます愛し…、夫である皆さんにとって益であることを…、また、夫の皆さんが喜んでくださることをしていこうとおられると思ひます。夫である皆さんにとって、信仰を持っている妻を持つということ…、何者よりも神様に従っていこうとする奥さんを持っているということは、本当は、かけがえのない財産のはずなのです…。

何故なら、何でも自分の言いなりになるような…、ただ忠実な“だけ”の奥さんなら、本当の意味で、神様が期待しておられたような、『ふさわしい助け手』(創世記 2:18)と仰い得ますか？この混沌とした世の中であって…、しっかりとした考えや意見を持っていて…、尚且つ、揺るがない信念を持っていたら…、それはご主人にとって、非常に頼り甲斐のある存在…、良き相談相手となってくれるのではないのでしょうか？この世の中で、難しい判断を迫られた時…、悪の誘惑にくじけそうになった時など…、様々な状況で、クリスチャンの奥さんは、有益な存在となってくれるはずだと、私は信じます…。

### ● イエス・キリストを信じる信仰は、家族を粗末にする？⇒No！

次に考えたいことは、イエス様を信じる信仰は“家族”を粗末にする、という…、これまた、誤解です…ひょっとしたら、ついさっき紹介した、マタイ 10 章のイエス様のお言葉…、「わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来た…、さらに、家族の者がその人の敵となります。…」というような、イエス様の教えを聞いて、「ああ、イエス・キリストの教えを信じ、従おうとする者たちは、家族のことを粗末にするんだらうな…」と思われるかも知れません。

でも、先程も言ったように、絶対に、そんなことはありません！恐らく…、最も有名なのは、出エジプト記 20:12 の、『あなたの父と母を敬え。…』という命令 & 戒めでしょ…。この教えを聞いてくださったら分かる通り、決して、聖書のみことばは家族を粗末にするようなことを命じてはいません。ですから、新約聖書でも、1 テモテ 5:8 で、『もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。』と教えられてある通りに、自分の家族や親戚を粗末にしたり…、あるいは、顧みなかったりすることを、聖書のみことばは、はっきりと禁じています。

ですから、イエス様が警告されたのは、どちらかと言うと、究極の選択の場合です…。神様の教えと、皆さんの家族との考えが違った場合…、そのどちらに従うのか？ということです。神様の教えは、皆さんもよくご存知のように…、私たちの想像を絶するほど、愛や憐れみに富んだものです。また、神様の聖さや正しさには妥協というものが一切ありません。しかし、私たち人間の教えの方はどうでしょう…。ある時には、平気で間違ったことや卑しいこと…、愚かなことを要求したりします。しかし、神様の場合は、そうではありません…。

つまり…、神様の教えと私たち人間との考えが食い違う時というのは、私たちが間違っている場合なのです！そういったような時に…、イエス様は、家族ではなく…、神に従いなさいと教えるのです！例えば、私たちの家族は、私たちのことを気遣って言うかも知れませんが、「信仰を捨てなさい」って…(私も、その昔、何度も家族から言われました)。しかし、もし、私たちが信仰を捨ててしまうとうなるでしょう…？ある人は、まだ、救われていなかったために、せつかく得ようとしていた救いを失ってしまうかも知れません…。また、ある人は、救いを失うことはなくても…、家族に福音を宣べ伝えるチャンスを失ってしまって…、家族が永遠の裁きに至ってしまうかも知れないじゃないですか…。

もちろん、これらは、あくまでも、私たち人間の目から見た時の感覚であって、本当に救われた者たちは、誰一人、その信仰を本当に捨ててしまうようなことは無いし、救われるはずだった人たちが救われないことも実際には起こり得ません。…と仰いますのは、本当に、私たち人間を救ってくださるのは、神様の御業であって、私たち人間の努力や行ないではないからです。…でも、私たちクリスチャンは、信仰を捨てる・捨てないということの重大さを誰よりも知っている者なのではないのでしょうか？

### ● 私たちクリスチャンが陥りやすい 問題 ？

ここで、少し、私たちクリスチャンが陥りやすい“問題”について説明させていただきます…。確かに、聖書のみに

ことばは、クリスチャンの妻たちに対して、「相手が、あなたに罪を犯させるようなことが無い限りは、できる限り、夫に従いなさい！」というようなことを教えています。…しかし、「実際の場合は？」と言うと、皆さんの夫や妻が、皆さんに対して、罪を強要するようなケースは、ほとんど無いのではないのでしょうか？

そういったような場合よりも、実際、多くの状況で起こってしまっている状況は、私たちクリスチャンの側が、必要以上に、相手に合わせることを避けてしまっているような場合です。…例えば、ここ最近では毎回、引用しているみことばですけれども、1 ペテロ 3:1-5 では、こう教えられていました。『1 同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとなるようになるためです。2 それは、あなたがたの、神を恐れかきこむ清い生き方を彼らが見るからです。3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人ながらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。5 むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちが、このように自分を飾って、夫に従ったのです。』

⇒つまり、クリスチャンの妻は、その夫が救われるためにも…、当然のこととして罪は別ですが…、それ以外のことは可能な限り、自分の夫に従っていきなさい、とみことばは教えるわけです。…しかし、実際には、多くのクリスチャンたちが、罪ではなくても、夫に従おうとしない、というケースが多いのではないのでしょうか？

どうか、皆さん、パウロが、どうやって宣教をしたか、パウロの証しを思い出してみてください…。1 コリント 9:18-23 で、パウロは、自分自身の宣教に対する思いをこんな風に告白してくれています。『18 では、私にどんな報いがあるのでしょうか。それは、福音を宣べ伝えるときに報酬を求めないで与え、福音の働きによって持つ自分の権利を十分に用いないことなのです。19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者となりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。21 律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者となりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。22 弱い人々には、弱い者となりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。23 私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。』

⇒このように…、あのパウロは、少しでも多くの人たちが救われることを願って、多くの人たちに仕えようとしていました…。だから、そんなパウロを通して、多くの人たちが救われていったのかも知れません…。もちろん、パウロは罪に対して妥協したわけではありません…。しかし、罪“以外”の部分で、パウロは、『自分の権利を』放棄して、キリストの福音を伝えていくような者であったのです…。

あのイエス様だって、マタイ 5:39-42 で、弟子たちに、このように教えてくださいました…。『39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。40 あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。41 あなたに一ミロン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミロン行きなさい。42 求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。』

⇒ここで、イエス様が教えようとしたことは、自分に与えられた権利を放棄する、ということです。ここでは、4つのことが教えられていました…。①まず、ここで言われている、「あなたの右の頬を打たれたら…」というのは、当時の文化で言えば、「暴力」ではありません。これは、当時の感覚で言えば、一種の侮辱なのです。…ですから、ここで、イエス様がおっしゃったことは、例え、人から侮辱をされようと…、私たち

は簡単に相手に歯向かうべきではないということ、なのです…。②そして、2つ目は、人から訴えられた場合です。その場合は、まず、自分の利益を守ろうとするのではなく、和解に努めなさい！ということでした…。③3つ目は、人から何かを強制されて…、それを断ることができない場合は…、むしろ、相手の期待以上のことをしてみせなさいということ…。④4つ目、人から助けを求められたら、できる限り、助けてやりなさい、ということでした…。どれも、自分のことだけを守ろうとして…、自分の権利ばかりを1番に主張していたら、できないことばかりです…。

でもね、皆さん。私たちは、そういったようなことを…、イエス様の生涯から…、何よりも、あのイエス様の十字架という模範によって、もう十分に学んでいるはずじゃありません？…ひょっとしたら、私たちは、どこかで…、「神様を第一にしている」という言い訳によって、罪以外のことも一切譲歩しないような…、どちらかと言うと、かたくなで、融通のきかないクリスチャンになってしまっていないでしょうか？（自分自身も反省…）

### ●妻が夫に従う 動機 とは？

最後に、クリスチャンの妻たちが、自分の夫に従う“動機”について考えたいと思います…。今回のみことばの、24 節には、『教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。』とありましたが、一体どうして、教会は神様に従うのだと思われます？

⇒どうぞ、最後に、1ヨハネ 4:19-5:3 をご覧ください。『19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。20 神を愛すると言いつつ兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。1 イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。』

教会とは、救われた者たちの集まりです。その教会が、神様に従うのは、その神様を愛しているからだ、みことばは教えます。つまり、「愛と従順とは連結している」ということを、このみことばは教えてくれているのです。確かに、その通りでしょう…。ここにおられる皆さんだって、そのことの証人です…。それと同じように…、妻も、夫を愛するが故に、その夫に従うのです。クリスチャンの妻は、その夫に…、ただ表面的に従えば、それですべての責任を全うしているわけではありません。ご主人を愛していくことが必要なのです！

### <励ましの言葉>

聖書が教える愛は、愛する者のために、行動し…、喜んで、何らかの犠牲を払おうとすることです。クリスチャンの妻である皆さんは、ご主人のために、どのような行動をし…、どのような犠牲を払っておられます？⇒今回のみことばが教えてくれているのは、クリスチャンの妻は、神様を愛し…、ご主人を愛するが故に、罪は別として…、その他の、『すべてのことにおいて、夫に従う』…、また、従おうとすることです…。

どうぞ、お1人お1人が、より成熟したクリスチャンの妻となっただけで、皆さんの夫婦と家庭がますます、神様によって、祝福されていくことを願います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。